

相容れない原理としての「公」と「私」：「武士道」再論

武士道は無神論を悪として斬り捨てるか？

Greatchain

2020/09/07

新渡戸稲造が、宗教ではなくて、宗教の代わりをなすものと言った「武士道」とは何であったか？ それは何であったかを問うよりも、**何でないか**を問う方が、わかり易いかもしれない。その「何でないか」を問うための鏡は、現在、崩壊しようとしているアメリカに、溢れかえっている。

それは、人間をどこまでも墮落させる勢力としての、「**無責任者の原理**」として溢れかえっている。それは**反トランプ**を叫ぶアメリカに、無神論、虚無主義、無政府主義、暴力、放火、略奪、そして、ほとんど文化としてのペドフィリアとして、全米に燃え盛っている。

私は「武士道」というものを、**能動的に自他の責任を自覚する生き方**、と考える。この責任の自覚は、何もないところから降って湧くものではない。それは**神を感じること**からしか生じない。それを（非科学的だとして）否定する無神論から出てくるのは、数学的なゼロや中立でなく、**意図的な、敵意をもつ「責任の放棄」**である。我々の生きている宇宙は、その背後にある意味や目的、インテリジェンスやデザインを、自然に感じさせるものである。それを否定すれば、「ゼロ」や中立や、公平な立場が得られる、と考えるのは間違っている。虚無主義（ニヒリズム）という言葉からわかるように、そこから出てくるのは、あらゆる望まないマイナス価値だけである。これが「無神論」という言葉や概念によって、多くの人々が、都合よく誤解させられていることの内容である。

無神論者たちの特徴は、理解力や想像力が著しく乏しいために、たとえば「私の命は、私のものであって私のものではない」という言い方を、理解せず、これを矛盾した、馬鹿げた考えとして一蹴することである。のみならず、彼らの「インテリジェント・デザイン」理論への敵意は並大抵のものではない。彼らが**必死になって理解を拒否する**やり方は、リチャード・ドーキンズの**滑稽なほど無理をした表現**に、よく現れている（『神は妄想である』など）。

IDの自然に導き出す神——スティーヴン・マイヤーに『神仮説の復帰：宇宙の背後にある心を明らかにする3つの科学的発見』という本がある——は、「特定の宗教」を説くもので

はない。それは、無神論を主張する人々が、自分の科学的中立を言い、相手を攻撃するために言う言葉である。IDの神（有神論）が「特定の宗教」を説くものでないのは、「武士道」が「特定の宗教」を教えるものでないのと同じである。あえて言わせてもらうなら、知的に劣った者ほど、道徳的にも劣っているのは、私の経験からも確かである。知性と倫理は区別できない調和の問題である。特に、「インテリジェント・デザイン」に対する、知性も良心も欠けた敵意において、私はそれを感じず。これは、アメリカの暴動や内乱と本質的に同じものである。

ひるがえって、武士道の「公」の原理と「私」の原理は、対立し敵対する、相容れないもので、公務員や政治家の使い分け、公私のようなものではない。それは人間の生き方の原理であって、「公」は責任者の、「私」は無責任者の生き方と考えてよいだろう。前者だけが、宇宙的な調和や幸福をもたらす原理であり、後者は、自分の利益だけを優先することによって、結局は破滅に至る原理である。

これは「特定の宗教」でなく、宇宙的原理というべきである。確かに私がこれを学んだのは、デイヴィッド・ウィルコックを通じであり、彼の依拠する *The Law of One*（一者の法）という、より高い次元の人間（Raと呼ばれる集団意識）の教えによるものだが、それが偏った教えだとは誰も言わないだろう。彼は、この対立する2つの原理を「他者のために生きること」Service for Others、「自分のために生きること」Service for the Self、と区別した。

これによって、無神論者を折伏することができないだろうか？ 私はできると思う。その方法は、「自分のために生きること」が、どんな悲惨な結果をもたらすかを、いま欧米で与えられている、無数の教訓によって、徹底的に学習させることである。神はそのために、この混乱と苦しみを引き起こした——「神は曲がった線を用いてまっすぐに書く」——という解釈が十分に成り立つと考えられる。このただ事でない異常さは、今、その未曾有の大実験が行われている証拠ではないだろうか？

いったい人間は、その無意識の深層では、誰であろうと、神の存在を受け入れるようになっている、と考えるのが自然だと思われる。それはID論者による「神仮説」の科学的確かさからも、十分に立証される。人間は人類史において、一時的に、傲慢や自信過剰から、無神論という邪説に傾いたことがあった。しかし科学的探究によって、ますます有神論への自信が固められている。人間は、本当は、神なしには生きていけないことを知っていると思われる。問題は、その無意識の知識がいつ目覚めるか、どんな形で目覚めるか、ということである。

「逆療法」という言葉がある。手荒な手段による療法である。これは人間を真理に気づかせるための、ショック療法だとも言える。旧来の宗教というものが復興しても、ほとんど役に立たないと思われる。常識に戻って「真人間になる」というようなことは、大きな目覚めとは関係がない。ものの見方がすっかり変わってしまうのでなければならない。意識革命でなければならない。いわゆる「量子飛躍」でなければならない。これは今すぐにも起こる可能性があり、30年、50年たっても起こらない可能性もあると思う。

ここに、今のアメリカを象徴する写真と見出しがある—September 4, 2020, NeonNettle



**ビルとヒラリーがトランプ支持者に警告：彼は我々の自由にとって危険人物だ
クリントン夫妻が新しい会見で、トランプを攻撃、トランプ側の
「善良な人民」に訴えようとしている**

この夫妻は、民主主義を装いながら、帝王として「私」の生き方に徹する予定だったアメリカ人の代表である。彼らは「自分のために生きる」原理しか見えていないことが、我々にはよくわかる。彼らは共に犯罪者であるが、それは身分の高さによって問われないはずだった。トランプ大統領は、その逆の「公」の生き方＝「他者のために生きる」原理を代表している。これは代表であって、現実に彼が聖人君子だという意味ではない。そのため、クリントン夫妻にとっては、トランプは現実に「危険人物」として悪なる存在であり、自分たちこそ「善良な人民」を率いる責任者だという主張も、本音であろう。（いつかヒラリーが、反抗する人民を「嘆かわしい」deplorableと言ったことがある。）

しかし、その帝王としての自分たちの生き方が、崩れていく現実を、クリントン夫妻は身をもって感じている。それはもう、元へ戻ることはできない。彼らの悲しみと絶望に満ち、怯えた表情に、よくそれが現れている。しかし本当を言えば、彼らは絶望状態は絶対的なものではない。これは意識の問題であって、物理的な問題ではない。彼らが生き方の原理

を、もし 180 度変えることができれば、彼らは救われ、目が開かれ、全く別の、思いもよ
らなかつた世界が現れるはずである。今、クリントン夫妻だけでなく、アメリカだけでな
く、世界全体がそのような体験を求められている。

この宇宙のあり方が本当はどうであるかを、科学的に説明する、インテリジェント・デザ
インの学者たちの講習会に出席した、ある若い女性が、わっと泣き出して止まらなかつた
というエピソードは、明らかにそれとつながっている。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/191218-2.pdf>

——以上